

## 自家移植の臨床的検討

三田市・大槻歯科医院 大槻 榮人<sup>1)2)3)</sup> (歯科医師)

【共同演者】川上正良<sup>2)</sup> 川上哲司<sup>2)</sup> 藤田宏人<sup>1)</sup> 大槻麻<sup>1)</sup>

小正裕<sup>3)</sup> 桐田忠昭<sup>2)</sup> 高橋一也<sup>3)</sup>

※ <sup>1)</sup> 三田市 <sup>2)</sup> 奈良県立医科大学口腔外科学講座 <sup>3)</sup> 大阪歯科大学高齢者歯科学講座

### 【目的】

歯の自家移植は、機能していない歯を利用して喪失した歯の咬合を再建する方法である。本研究では歯の移植治療の成績と予後を調査し、経過良好例と不良例について考察を行ったので報告する。

### 【方法】

当院で歯の移植を行った 44 例 53 歯を対象とした。調査項目は、年齢、性別、移植歯の歯種、歯根完成度、萌出状態、受容歯の歯種と欠損状態、受容部の病状、移植後経過観察期間、予後（良好・不良（抜歯））とし、1 年経過時の生着率を算出した。また、移植歯の種類と受容部の部位の関係を検討した。

### 【結果】

男性 7 人、女性 46 人で、40 歳未満が 44 人であった。第 3 大臼歯を移植した例が 52 歯、犬歯を移植した例が 1 歯であった。移植方法は、ほとんどが抜歯と同時の即時移植で 49 歯（92.4%）であった。移植歯は、23 歯（43.4%）が埋伏歯で、半萌出が 12 歯（22.6%）、萌出歯が 18 歯（34.0%）であった。移植歯の歯根完成度は 44 歯（83.0%）が根完成で、未完成は 9 歯（17.0%）であった。移植別には、下顎左側第 3 大臼歯を同顎同側第 1 大臼歯に移植したものが 10 歯と最も多く、次いで下顎右側第 3 大臼歯を同顎同側第 2 大臼歯に移植したものが 8 歯であった。受容部の歯はほとんどが根尖性歯周炎で 50 歯（94.3%）であり、最後方部が 30 歯（56.6%）、中間部は 22 歯（41.5%）であった。生着率は、1 年経過後で 96.2%（51/53）、予後不良で抜歯に至った例が 2 例あった。2 例とも受容歯が最後方臼歯であった。

### 【考察】

歯の移植は同顎同側への移植が多く予後も良好であったが、受容部が最後方歯になると予後が低くなることが示唆された。